

『白樺派の作家と作品』

本多秋五

未來社刊

『白樺』派の作家と作品

1968年9月15日 第1版第1刷発行

定価 850円

©著者 本多秋五

発行者 西谷能雄

発行所 株式会社 未来社

東京都文京区小石川3の7の2

振替・東京87385番 電話(814)5521 代表

本文整版=ふじ活版 本文印刷=萩原印刷

製 本=今泉誠文社

乱丁・落丁本はおとりかえます

『白樺』派の作家と作品
目次

I

思想家としての武者小路実篤……………七
初期「雑感」集について……………二四
代表作についてのノート……………三九
『或る男』(三九)／『友情』その他(四〇)／『第三の隠者の運命』その他(四一)／『幸福者』など(七二)
武者小路実篤論……………七五

II

『白樺』以前の武者小路実篤……………一〇九
志賀直哉小論……………一三九
志賀さんと志賀文学……………一六〇
日記について——志賀日記を中心に……………一六六

神なき自我 一七

III

長与善郎論 一八

作品二つ 二三

『誰でも知っている』(三三) / 『恥』(三七)

IV

里見弴おぼえ書 二三

代表作についてのノート 二四

『多情仏心』(二四) / 『かね』(原題『金』(二四八) / 『極楽とん

ぼ』(二五))

V

有島武郎のこと 二五

有島日記ノート	二六一
二つの作品	二七九
『或る女』(二三九) / 『星座』(二六五)	
『或る女』をめぐって	二九七
わかりにくい有島武郎	三二二
私小説的にみた『或る女』	三三六
あとがき	三五七

I

思想家としての武者小路実篤

1

武者小路実篤氏は、作家であり、一種の詩人であり、画家であつて、いわゆる「思想家」のカテゴリにはいるかどうか、疑問がないではない。

しかし、氏の言動は、個人の内面生活に感化をおよぼし、それを規制する。(もちろん無縁な人は別だが。) いわゆる「思想家」の言説の多くが、個人の問題は個人の裁量にまかせる余地を多く残しているのに対して、氏の感化はより直接的だといえ、氏は「人生の教師」である。文学者のなかでも、もっとも「人生の教師」らしい人であり、文学のワクを外して考えても、もっとも「人生の教師」らしい人だと思える。いわゆる「思想家」の意味もアイマイだが、ここでは「人生の教師」の意味をふくむものだとすれば、武者小路氏はあきらかに「思想家」の一人であり、しかも有力な「思想家」の一人だといえる。

武者小路氏の思想は、ある意味では単純である。氏の思想の主要骨格は、「自己を生かす」とか、「自分も生かし、他人も生かす」とか、「人類の意志」とか、「われはかくつくられたり」とか、おそらく五指を屈すればたるほどの命題によって構成されている。しかし、おなじそれ

らの主要命題の組合せから、あるときは社会的問題への完全な無関心がみちびき出され、別のときには積極的関心がみちびき出され、あるときには戦争否定の絶対平和論がとなえられ、別のときには戦争への支持協力が帰結されるのをみれば、氏の思想はそんなに単純といえない。

武者小路氏の思想は、理論構成が単純でルーズだが、それだけに臨機応変の転変が自由であり、それだけに複雑でもあり、また、豊富でもある。実際にまた、氏の思想がもしその臨機応変の妙なしに、概念構成の骨格だけで語られたとしたら、人々に訴えかける力はほとんど問題にならなかつただろう。その意味で、氏の思想の実質は、むしろその時々肉づけの妙にあるともいえる。もしかしたら、氏の思想が生きる秘密は、いわゆる思想などとは無関係な、ある別の力によるのかも知れない。

頭がはたらいてくれるという、その頭のはたらき、脳の力は、思想とは別のものである。思想は伝達可能なものである。脳の力は伝達可能でない。絵が描ける能力、絵がわかる能力、思考をある一事に集中して言葉を迅速に駆使できる才能——これらはすべて思想とは別の伝達不可能なものである。長寿を保って活動力の衰えない元氣——これはもういうまでもない。

尾崎一雄の『虫のいろいろ』を読むと、力学上とべないはずの構造をもちながら、猛烈な勢いでブンブンとびまわっている蜂のことが書かれている。私はいつか武者小路氏をこの蜂にたとえたことがあるが、氏には実際そんなところがある。力学上のリクツを超越してとびまわる飛翔力などはもちろん「思想」の世界に属さない。しかし、その「力」がなかったら、武者小路氏の「思想」も存在しなかつただろう。

力學上のリクツをこえてとびまわるその「力」は、前にあげたいろんな才能や元氣のより合
わさったものでもあるが、そこにプラスαがあると思う。そのプラスαは、いわくいいがた
いものではあるが、私のみるところでは、内部からの個人的なものと、外部からの歴史的なも
のと、二つのものの相関関係から生れているように思われる。この場合、外部からのものは、
日本歴史を形づくってきた日本の心性ともいうべきものだが、その方はここでひとまず度外視
するとして、内部からのものだけに注目して強いて名をつけるとすれば、それは「信仰」だと
いってよからうと思う。誰にもあたえられているのではない天賦の自己信仰力である。

作家の思想を語るのに、その人の作品をはなれては無意味である。画家の思想を語るのに、
その人の画をはなれて語るのが無意味なのとおなじである。しかし、単行本になったものだけ
でも五〇〇冊以上にのぼるといわれ、原稿を断るより書いた方が早いという武者小路氏の全著
作に眼を通して、忠実にその作品の具体に即して思想を語ることは、いまの場合、不可能であ
る。ここでは氏の思想表現のピークをひろって、そこにあらわれた変化と、その変化にもか
かわらず一貫するものとを眺めることにしたい。荒削りの論になるのはやむをえない。

氏の思想表現のピークを、最初期のいわゆる個人主義の主張と、「新しき村」の創設と、大
東亞戦争への協力態度と、戦後の仕事、とに私は求めたい。

2

武者小路氏が『白樺』の創刊に先だって上梓した第一創作集『荒野』を絶版にして、その後

いかなる著作集にも全集にも収めていないのは、武者小路氏をして武者小路氏たらしめた個人主義、氏のいわゆる「自己のため」哲学が、まだそこでは確立されていなかったからである。武者小路氏を武者小路氏たらしめた「自己のため」哲学とは、つぎのようなものである。

「自分は生れつき自我に執着する男である。されば自分は自我を何物の犠牲にしようとも思わない。寧ろ自我のために何物をも犠牲にしようと思つてゐる。……かく思つてゐる自分は自我のために働くことをもつて、最も嚴肅なる意味における道徳家だと思つてゐる。宗教家だと思つてゐる。……かかる自分は見かけすら自我を犠牲にする余裕がない。また、そうするのが卑屈のように思える。かくて自分は自我のためにすべてを犠牲にすることを得意にする。」〔「自分の筆でする仕事」〕

この氣負ひ立つた調子の言葉は、個人主義のはるかに踏みかためられた道から出發したわれわれが卒然と読むと、一体、思想史のどのあたりに位置つけたらいいのか、見當がつかない。

「母がよく言う。『お前は妾がそんなことをしてくれと死ぬと言つておどしたら、そんなら死んで下さいと言うにちがいない』と。實際自分もそう思う。」〔「自分を庄えつけようとするもの』〕
 といった烈しい言葉も、女手ひとつで育てられた氏がどれほど母親思いであつたかを知らねば、本當の烈しさが評価できない。

氏が、傍若無人とみえるまでに勇しく自我本位の立場を表明するのには、「自分は死刑になつてもかまわない」という權威を自分に感じない限り、自分は日本において思想の自由を得ないことを知つてゐる。かくて自分は思想の自由を得んために死刑になつてもかまわないという勇氣

をつくることに苦心している。」「『自分は弱いから強い』というほどの決意を要したのである。それほど分厚い抵抗が氏をとり巻いていたことを考へるとき、はじめて自己本位の立場を天下に宣言することが「最も厳肅なる意味における道徳家……宗教法」たるゆえんだと氏がした、その深い使命感と予言者の気魄を感得することができる。

乃木大将の殉死をさして、「ある不健全なる時が自然を悪用してつくり上げたる思想にはくまされた人の不健全な理性のみが、讚美することを許せる行動である。西洋思想によつて人間の本来の生命に目ざまされた人の理性はそれを讚美することを許さない。」「『人類的、附乃木大将の殉死』と、鷗外や漱石をも瞠若たらしめる言葉を吐いたのは、「ある克己はいいことである。しかしある克己は最大罪悪である。旧劇に出てくる善人はよくこの最大罪悪の克己をしている。そうして死ぬ以上に苦しんでいる。自分もゴーストにとつつかれていゝからその時必ず涙ぐむ。しかし自分の若い血は一方で嘲笑している。自分を愛してくれない夫のために身を売る女などはその最も馬鹿な例の一つである。それをまた勧める兄とか親とか更に馬鹿な例である。」「『ある克己』という思想、「……あらゆる欲望の弱くない、そうしてあらゆる欲望を生かそうとする私には、今までの人間の教では、殊に日本の教では満足が出来ませぬ。日本の今までの教は僭越な、暴君的な、或は女々しい、奴隸的な教です。かくて日本人は妥協的になっています。」「『自己の為』及び其他」といふ思想を母胎としていた。それだけの思想の根があったのである。そこにはまだ社会に承認されぬ氏の全存在的な主張があった。

これらの言葉は、芥川竜之介が後に「文壇の天窓を開け放った」と評したものが、実際に

この当時の武者小路氏には、おさえつけられていた螺旋バネが一挙にはね返ったという趣き、
 鷗外も漱石も自然主義者たちも脱ぎ棄てえなかつた思想の殻を、ゆで卵の殻を剥くようにく
 りと脱ぎ棄てたという趣きがある。この時期の氏は、学問や教養によるのではない、生れなが
 らの人、自然によってつくられた人、という感じを禁じえない。第一に、あの小学生にもわかる
 文章が天才的である。「自分は女に餌えている」という、率直で、まじめで、嚴肅でさえある
 『お目出たき人』の書出しが天才的である。

武者小路氏の個人主義は、今からみれば、ルソー的な個性解放とゴッホ的な表現意識の癒着
 したものであって、そこに自然科学的実証精神との格闘という一九世紀の厚みがぬけ落ちてい
 たと思われるのだが、当時にあつては、思想における封建性の打破に重心がかけられて革命的
 に作用し、大正文学の扉をひらく合図になつた。

氏の大胆不敵な個人主義宣言と、西洋の天才を讚美し、彼らにひとしからんと身もだえする
 英雄主義に対しては、もちろん賛否の声さまざまで、「自然主義以前」とか、ドン・キホーテ
 とかいう嘲罵も浴びせられたが、結局、それは末期自然主義の無氣力を破って、狭くはあるが
 生き生きした大正文学の扉をひらくものになつた。

当時「無車」と署名し、「無茶」といっても当らなくはない、と思えたほどの氏の野人ぶり
 には、貴族出身の人なればこそ、と思える節がある。貴族には何事もゆるされているという無
 意識の意識があるのか、いいにつけ悪いにつけ、平民どもには企てえぬことを思ったままにや
 つてのける人がある。武者小路氏の母方の親戚にあたる烏丸という伯爵は、三浦の金田で、フ

ンドシもないまるハダカで他家を訪問し、「今日は大礼服できた」といって座敷へ通り、平気で話をしていたことがあるという。

部屋住み時代の武者小路氏は、召使たちからおそらく「殿様」とか「若様」とかよばれていた人である。氏の兄公共氏が、「大正天皇の御即位の式の時」といえば大正四年のことだから、外務省へは行ってまだ日の浅いころのことだろうが——「その身分相当の礼服」をきた姿をみて、氏の母堂は「武者小路家の当主も落ちぶれた服装をしたものだ」とつぶやいたという（『兄の思い出』）。お公卿さんならではの話である。青年時代の氏の、思ったまま考えたままをズケズケと、単刀直入に表現してのけた野人ぶりは、氏の氏育ちと無関係でなかったと思える。

満二十六歳の誕生日にさいして

自分は今までの自分が来た道を顧みる。

自分は何時でもその時一番高く思えたものになれる心算でいた。

という傍若無人な文句には、その貴族的な気位の高さと、貴族なるがゆえの野人性との、ユニークな化合がみられるように思う。

あの平明率直な、平民的という以上に民主的な文体が示しているように、氏は平民以上に平民的であった。これは大休において『白樺』派全体に通じていえることである。しかし、有島武郎をふくめて考えれば『白樺』派とほぼ同世代といえる魯迅の、あの重心の低さと比較する

と、それはどこかちがうのである。魯迅に比較すれば、武者小路氏を先頭とする『白樺』派の民主性、人間性、自由主義思想が、一般民衆にさきんじて特殊的に解放された人々だけのものであり、その意味で貴族的なものであり、支配者的性格のものであったことが、わかると思う。武者小路氏をして武者小路氏たらしめた最初のものである「自己のため」哲学は、小学校の運動会で楽しく遊ぶ子どもたちを眺めて、もしこのうちのだれかが危険におちいって、自分が命を投げ出せば助かるといふ場合、自分は喜んで命を投げ出すだろうと考え、つぎの瞬間、「いや、自分は死なない。自分は小供等の死ぬのを見殺しにする、……見殺しにして見せる。そうして自分を生かす。」（『自分の友達』）と考える種類のものではあった。それがまた戯曲『桃色の室』の哲学でもあった。

最初から、隣人の不幸に対する痛苦の情がなかったのではない。このことを見落さないことが肝要である。武者小路氏の個人主義における、ある意味での他者の消失は、さきに私が自然科学的事証精神といったもの、その文学上のあらわれである社会的な視野のひらけたりアリズムの欠如と関連している。その意味で、氏の個人主義とは主観主義だ、といつてのけられなくもない。要するに、選ばれた人でありすぎる氏には、名もない民衆のひとりひとりがまた「我はかくつくられたり」と叫びうる存在であることに、実体的には理解の手がおよばなかったのだといおうか。このことは、かの優柔不断な有島武郎と対照してみると、よくわかると思う。